

2008年4月19日
全林野会館（プラザ・フォレスト）

鈴木則子氏 講演

「不忘の碑」

中国残留婦人の過酷な経験と託された使命

講師プロフィール

1928年生れ。東京都国分寺市在住。
1943年旧満州に開拓団として家族と
共に入植。1943～44年父母と死別。
1950年中国で結婚。
1978年中国から永住帰国。
1982年「中国帰国者の会」設立。
「中国残留婦人・残留孤児」の帰国援助、
帰国後の生活相談・日本語教室、
行政への働きかけ等の活動。
国家賠償を求めて提訴。
中国帰国者の会 会長

「不忘（わすれず）の碑」

調布市の延浄寺（えんじょうじ）
境内に建立された碑。この碑には
次のように刻まれています

國に従って
國に棄てられた人びとを
忘れず
再び
同じ道を歩まぬための
道しるべに

中国帰国者の会 鈴木則子

「商社九条の会・東京」事務局

連絡先 住所：〒247-0061 鎌倉市台 2-20-41-303

Tel・Fax : 0467-46-7401

E-mail : akim@mist.ocn.ne.jp

目次

講演	不忘の碑	1
	わたしは何故満州に渡ったのか	1
	中国で生き残ってわかったこと	1
	亡くなった多くの犠牲者から託されたわたしの使命	2
	開拓団での生活と逃避行の始まり	3
	何度も夢に浮かんだ王君の怒り	5
	お百姓さんに薬草で傷の手当てをされて	5
	トウモロコシ畑で見た地獄	6
	銃に追われて、麻畑から深い溝に飛び込んで逃げる	6
	親切なお百姓さんに、再三にわたって助けられる	7
	姉たちと引き離されて一人に	8
	ソ連兵の蛮行を目撃する	8
	親切なお婆ちゃんから賭博師の下へ	8
	養父に引き取られる	9
	逃避行後はじめて声をあげて泣いた	9
	日本の行った戦争は一体何だったのか	10
	遅らされた帰国、冷い日本政府の対応	11
	中国帰国者の会の発足、そして国の責任を求めて裁判に	11
質疑応答		12
	Q1	12
	Q2	13
	Q3	15
	Q4	15
	Q5	15
	Q6	16
	Q7	17
	Q8	18

講演 不忘の碑

中国残留婦人の過酷な経験と託された使命

わたしは何故満州に渡ったのか

ご紹介いただきました「中国帰国者の会」の鈴木則子でございます。わたしは老人で、わたしのような者が皆さんの前でお話しするのはと、ちょっと緊張しております。

わたしは昭和3年に東京の京橋で生まれました。父は青物問屋の4代目で、お店をやっております。6人兄弟の四女として生まれ、その後京橋の女学校に入りました。その当時はもう国家主義、軍国主義思想の時代でした。私もそういう風に考えたんですけども、お国のため東洋平和のため、犠牲になっても死んでも天皇陛下のために尽くす、そういう教育の中でわたしは育ってきました。そういう教育の中で育ってきた中の一人として、現実にはわたしは本当に日本は偉いんだ、立派なんだと信じるようになっていました。日本人としての誇りというものを持つようになってたんです。

そういう状況下で、「満蒙開拓」という国策が、戦火の中に始まりました。青年義勇軍、花嫁部隊、そして多くの女性たちが通信部隊、医療部隊として、どんどん中国大陸に送り出されるようになったんです。わたしは当時、日本のことを無条件に信じていました。皇国少女として育てられ、本当に日本は偉いんだと信じていました。その時は何のために戦争をしているのかをぜんぜん考えてもいませんでした。

ただその中でわたしが一番悔しかったことがあります。それはわたしたち家族が東京開拓団として大陸に行くことになったことでした。父は商売人で、畑仕事などに行ったこともないのに、広い荒原の中で慣れない畑仕事で病に倒れて、3ヶ月後に亡くなってしまいました。母も後を追うように亡くなりました。開拓団にいた若者は戦争末期までにどんどん兵隊にとられました。そういう中で、日本は立派な国で、わたしたちは東洋平和のため、五族協和のため一所懸命働くんだと本当に思っていました。

でも大陸に行ったことは、結局、わたしが侵略者の一人として加害者の一人になることであり、わたしの逃避行の苦しみ、あの大きな惨事、そして自分の身体の傷、その痛みよりももっと凄く深い傷を胸の中に刻み込むこととなりました。

中国で生き残ってわかったこと

戦後、わたしは中国で助けられて中国で生活をします。その生活してる中で事実を知り、次第に真相が分かり始めました。本当に悔しいのと、どんな思いで生活してきたかそのことは一言では表わせません。日本は本当に立派な国だと思い信じ切っていたわたしが、現実に見た中国社会の中で、わたしたちは侵略戦争に加担したんだということを知り、その

思いで、すごく社会の中で苦しみました。自分は、これからどうやって生きていったらいいのか、どのように前向きに進んだらいいのか、それが身体の傷よりも凄く辛く、重い気持ちでした。そして、一刻も早く日本に帰りたい、日本がどんな国でも、日本に帰っちゃえば何とかかなる、どんな国でも自分の国だから帰りたい、そういう思いで一杯でした。

そういう中で、解放後、展示会がありまして、そこでは戦争の事実を展示します。みんな学習に来ます、過去の戦争を忘れてはいけないと。わたしは、行こうか、行くまいか、どうしたらいいだろうと悩みました。家族にとっても悩ましい問題でした。家族からは、行くのを止めなさいと言われたんです。でもわたしには、何度死のうとか思ったか知れない重大な問題です。自分の人生をこれからどうやって変えていかなきゃいけないのかということを考える時に、事実を見なければわたしはこれから生きていられないんだ、ということその展示会に参加しました。

その時はもう地獄です。石井 731 部隊、南京虐殺、そういう写真がズラーっと並んでいました。日本の軍隊がこんな悪いことをしたのは本当なのか。わたしは心に針が刺されるように痛みました。穴があれば、その中に潜り込んで死んでしまいたい気持ちになりました。羽があれば一刻も早く家族をつれて日本に帰りたい。こういう現実は見たくない。そういう葛藤の繰り返しの中で 1 年ほどその勉強会に参加してました。そして事実が明確になればなるほど、本当に辛い地獄のような思いでした。

中国で生活したのは 35 年間ですが、日本に帰るまでの間、もう心の闘争でした。自分はどう生きればいいのか、自分は現実はどう向き合って、どうやって考えて生きていくのか、ということ常々考えるようになったのですね。

わたしたちは、こういう状態で中国で長年放置され生きてきたんです。わたしたちは、この現在の日本の中で、戦後 62 年を過ぎた今日、戦争の傷跡は未だに癒されることもなく、みなさん本当に苦しんでいるのが現実です。

わたしは、この自分自身の体験、そして事実を多くの方に知ってもらいたい。そして、わたしたちのように国に対して何の疑問も持たない、何の批判もできない、そのようにならないように、みなさん一人ひとりの多くの方がこれを認識して頂きたい、とわたしは願っております。

亡くなった多くの犠牲者から託されたわたしの使命

わたしは現在中国帰国者の会を主宰しておりますが、亡くなった多くの犠牲者の方に託されたわたしの使命だと念じております。これは無念を抱きながら亡くなり大地に眠っている犠牲者の方々の思いです。それをこうして皆さんに伝えられることができれば、わたしは亡くなった方に応えられるのではないかと思います。これからの日本を背負っていく、特に若い人たちにも、こういうことを、わたしの体験を本当に聞いて欲しい。後世に遺して行きたいというのがわたしの信念でございます。

戦争は命を奪い、一人ひとりのかけがいのない人生を踏みにじるものです。そしてその被害は子孫にまで続きます。今、悲しいことに世界の中でまだ戦争が起きています。悲しむのは老人や子ども、婦人、そういう人たちです。わたしは日本の憲法九条の理念を世界の各国に持ってもらいたい、そして世界中が戦争の無い、人権が守られ、平和で仕合せな人間らしい生活がしていられるように、わたしは本当に祈るばかりです。

もう戦後 62 年経ちましたけれども、まだまだ未解決の問題が山積みになっております。わたしが何故満州に行ったのか、これはわたしが今も苦しんでいることです。関東軍に旗を振って、勝ってくれと日の丸の旗で送り出したが、いったいこれは何だったのか。そして国とは、国民とは何だったのか、ということが未だに心の中で解けません。これからわたしの体験をお話ししていきますが、1 時間なので、簡単に詰めてお話しします。

開拓団での生活と逃避行の始まり

先ほど申しましたように、父親はしぶしぶと開拓団に参加しました。東京開拓団ですから商売人の集まりなんです。とにかく開拓団の生活は厳しいものでした。みんな倒れて亡くなっていく。戦争末期には 18 歳以上の働き盛りの人は、どんどん召集されてしまいます。その中で、働く人は婦人、子ども、老人、これしかいないです。毎日、天皇陛下のために、関東軍のためにみんな増産するんだ、という団長の訓令に励まされて、それに応えながら、婦人は赤ちゃんを背負いながら畑に出て、慣れない大地で身を奮って、頑張ってきました。

そして日本の敗戦直前の、ソ連軍参戦です。今考えてみますと、わたしたちの開拓団は、ソ連国境に本当に近いところに張りつけられていましてね、だからソ連が進攻すれば、もう直ぐに着くんですね。ソ連軍の侵攻に気づいた時にはもう既に逃げ遅れ。毎日頼っていた軍隊は既に南下してしまい、何の知らせもくれませんでした。わたしたちは何も分からない。開拓団全員約 600 名の慌しい逃避行が始まるんです。「関東軍は何処にいるんだ。」「援軍を求めろんだ。」「何が起こったんだ。」みんなで騒ぎながら、山野を彷徨いました。本当に幽霊集団です。土砂降りの雨に叩かれながら泥沼の道を歩むのも、凄く大変なことです。靴は汚泥に剥ぎ取られて、もう裸足で歩いているような状態です。そこに襲い掛かってくるのが暴民です。そしてソ連軍戦車の地鳴り、空飛ぶソ連軍の飛行機、それこそ地獄の道を彷徨っているような状態でした。

そんな時に、赤ちゃんが泣くと見つかってしまうから、「とにかく赤ちゃんを殺せ」「赤ちゃんを殺さなければ困る」「みんなに迷惑掛ける」と迫られ、どうせ死ぬか生きるか分からない時だからと言うので、その中で母親も狂ってしまう。狂う母親たち、それを見ててもただ無言で歩くしかない。ある人は列の中でお産する、それで亡くなっていく。病気の人は、「殺してくれ、わたしは付いていられない」と叫ぶ。そういう叫びを耳にしながら、あるお母さんは、赤ちゃんがもう既に死んでいるのに、背中にしっかりと縛って歩いてい

く。あるお母さんは、あんたたちは、もしかして誰かが拾ってくれるかもしれないから、と子どもをコーリャン畑やトウモロコシ畑に置き去りにした。そういうかたちで残留孤児が発生したんです。

このような状況の中で、行く宛てがなくなって、一旦、集団自決することになったんですが、ある人が、わたしたちは何も分からないままに自決したくない、ここまで生きてきたら、生きている人がとにかく軍隊に駆けつけるんだ、長春には関東軍司令部がある、そこへ行こう。歩けるだけ歩く、生き延びた者が、軍隊で問い合わせする、それしかないということになりまして集団自決は中止になりました。

そこから再び逃避行が始まるのですが、とにかく暴民が襲い掛かってくる、荷物は盗られる、着るものはとられる、そういう慌しい中で、わたしたちの40人くらいの集団が本隊から外れてしまったんです。うちの本隊はあと残りの500名くらいですが、それが丁度長春に辿り着く直前、長春の手前、洮南(トウナン)の西の丘で、ソ連軍の一斉射撃で全滅したと、後に聞かされました。その中にはわたしの兄弟もいます。わたしたちは本隊を追うために山野を彷徨いながら逃げるんです。昼間はコーリャン畑、トウモロコシ畑に密かに潜んでいるんですが、だんだん戦火が悪化し、暴民も畑の中へ入ってくるようになりました。そして、収容所に行こうと思ったんですが、収容所では餓死、そして発疹チフス、人身売買、悲惨なことに野獣のようなソ連軍に囚われ井戸に跳び込んで死んだ女性もいます。女性の身としては、本当に自分の身を守るために、懸命に逃げなければならない事態でした。

そういう中でわたしたちは、一人、二人、三人と亡くなる人が出て、40人が30人になり、30人が20人になりどんどん人は殺されていきました。最後に一人の小母さんが、槍に刺されて息絶え絶えになりながら、「誰か生きててくれ。生きて日本に帰って、親族や国に訴えてくれ。わたしたちは何でこんなザマで死ななきゃなんないのか、ということ伝えてくれ。」と言った言葉がわたしの胸に刻みついております。それも何処か土に埋めることもなく、わたしたちは何とか逃げなければいけない。逃げている内にどんどん周りの人は殺されていく。わたしの姉も義兄も、～わたしの義兄は、あの逃避行が始まった8月12日の前日に召集令状が来たんですが、次の日にもう逃避行になったんで、召集令状を手にしながら、逃避行でわたしたちを最後まで守ってくれたんですが～、殺されました。そして、わたしたちが着ているものは、暴民に剥ぎ取られます。取られて仕方がなくてトウモロコシの葉っぱを身体に巻いて、このように押さえて、～何度か死のうと思うほど恥ずかしかった～、しかし、これしかなかったんです。でも、また一方では善良なお百姓さんもいた。着るものや、食べるものを持ってきてくれた。だから、追いかけられながら、助けられながら、何とか生き延びることができたんじゃないかなと思います。

逃避行を続ける中で本当に、もうどうしていいか分からない。わたしたちは何処へ行ったらいいのか、本隊はどうしたんだろう、と戸惑うばかりでした。

何度も夢に浮かんだ王君の怒り

そして暴民に襲われる中で、今度はわたしが怪我をします。崖から突き落とされて脱臼しました。もともと、足に銃弾による破片が刺さっていたんですが、その足が脱臼してしまっただけです。痛みで意識が朦朧となった時に、わたしは夢を見ました。

その夢は開拓団にいた時の夢でした。その頃、わたしは学校の代理教師をしてました。先生がいないので、子どもたちを纏めるために、勉強を教えるために、学校の代理教師をしていました。その頃、ボーイ、～昔はボーイと言うんですね、お掃除したり、ストーブを焚いたりする男の子のことを～、として学校に来ていた子どもがいました。わたしとても仲良かった男の子で、名前は王君といいます。その子がある日学校を休んだので、王君の家に行って、どうして休んだのと何気なく言ったら、お母さんが高熱を出したので看病で休んだと言うのです。ところが王君の家には家族 5～6 人で一枚の掛け布団しかなかった。ああ何でこんな貧しいんだろう、わたしは生徒たちに声を掛けて、家にあるもの、お布団や生地、そういうものを集めてみんなを持って行ってあげようと呼び掛けました。みんなでわっしょいわっしょいと王君の家に運びました。生徒達の親は喜んでわたしの呼びかけに応じてくれ、わたしも薬を持って行ってあげて、何とか治りました。王君の家族は喜び、三日後に、その子は学校にきました。

その時にわたしが思ったことは、何でこんな広い大地があって、こんな広い畑があるのに、何でこんな貧しいんだろう、ということでした。それで、何気なく王君に、それを聞いてしまったんですね。そしたらとても仲良かった王君が、急に目の色を変えて、「何言ってんだ、俺たちの村はお前たちが占領したんだ。みんな追い出されてバラバラに移住してる。それで家はハルサメを作ってるから残された。父親は労工で、連行されてしまった。そのためにボクが働かなきゃならない。ボクは日本人が憎い。憎いけど働かなければ家族を養っていられない。だから、苦しいんだ。」もう怖い顔でした。

でも、その当時のわたしは、日本はそんな悪い国じゃない、そんな悪いことをしてるはずがない、と思っていたんですね。意識が朦朧としている時に、いつも浮かんでくるのが王君でした。逃避行の時に暴民が襲ってくるのは何でだろう、何で日本人をこうも憎むのかということは何となく分からなくなっていたんです。それで、もし王君の言った言葉が正しかったら、わたしは王君に謝らなきゃならない。自分の考えていたことが過ちだったと。じゃあ日本は悪いことをしたのか、それもよく分からない。その繰り返しがその朦朧としている中に浮かんでくるわけです。やっと目が覚めて周りを見回すと茫々とした草の中に寝込んでいました。でもいつまでもここにいたら見つかって大変だから別のところに行こうと再び立ち上がって逃避行です。

お百姓さんに薬草で傷の手当てをされて

また多くの暴民が襲ってきました。せつかく貰った衣類もまた剥ぎ取られます。そういう中で、わたしの二人の姉が鎌で頭を斬られました。物凄い血が溢れてきてどうしようも

なくて、傷口を粘土で押さえたり、もぐさで押さえたりしている内に、お百姓さんが走ってきて、なにか薬草を練って張ってくれました。わたしの足の傷もいろんな薬草で手当してくれました。しかし、そのお百姓さんたちは、「あなたたちを自分の村に連れて行くことはできない。今、村にはソ連軍が入っている。ものを運んであげるから、ここで少し休みなさい」と言われ、本当に神さまみたいに見えて嬉しかったです。でも、わたしたちはいつまでもこうやって甘えちゃいけない、早く本隊を、～本隊がもう既に全滅したことも知らず～、追っかけなければいけない、長春に行くんだと焦る気持ちが先立っていました。ところが長春に行く道も分からない、どうしたらいいだろう、と戸惑うばかりでした。

トウモロコシ畑で見た地獄

わたしはそこを離れることになりました。移動してトウモロコシ畑に入り、三本のトウモロコシを失敬することになりました。トウモロコシがわたしたちの生きるお米なんです。食べるものはそれ以外に何もありません。トウモロコシを生で齧って何とか飢えを凌ごうというわけです。頭の怪我のために姉たちもみんな弱ってるし、わたしはまあ何とか元気だったので足を引きずりながらトウモロコシ畑に行きました。不気味な臭いがしたので、それに引かれて行ってみたら、死体の山でした。見たらみんな日本人です。わたしはそこで呆然として立ち竦んでしまいました。地獄です。この目で見た地獄は、一生忘れることはできません。まだ血が乾いていません。

そうしている内に、もう太陽が赤くなり、夕陽になった頃ですね、ソ連軍のトラックがトウモロコシ畑に入ってきて、兵隊が降りてきました。我に返ったわたしは死体の中に潜り込みました。息を忍んで死んだ振りをしてたんですが、見ていると、銃剣で死体を一人ひとり突くんです。子どもの死体を銃剣で刺して空中に投げ捨てるんです。そうすると、お腹から腸が出る、腸が空に飛んで行く。それを見て、わたしは暫く意識がなかったんです。

気がついたらソ連軍はもう彼方にいなくなっていました。わたしは我に返って、早くみんなにトウモロコシを渡さなければいかんと起き上がったんですが、鶏がもう啼き始めた。中国では鶏が啼き始めると3時なんです。朝3時、もう人が出てくる。怖い。早く移動しなきゃいけない。小川の水で顔をとにかく洗って、杖を杖に足を引きずりながら3本のトウモロコシを手にして、みんなのいる場所探して、みんなのところに行きました。でもみんなにはこの目で見た地獄の話はしませんでした。みんなにその話しをする勇気がなかったんです。

銃に追われて、麻畑から深い溝に飛び込んで逃げる

5歳の子供が、「おかあちゃん、なんでほらみんなの煙突から煙が出てんだよう、なんでお家に帰らないの、なんで殺されなきゃなんないのお」って母親に訊くんです。母親はその子を抱きしめて涙もありません、無言でした。わたしたちも、何も言えません。何と

か食べさせなきゃいけない。子どもはお腹が空いたんだと訴えたかったのでしょう。

とにかく空腹を忍んでも、とにかく息がある限り、わたしたちは生き延びて、関東軍の軍司令部に行かなければいけない。それで、みんなで励ましながら歩いたんですが、レンガで造った大きな家がありました。前にポンプのある井戸があったんで、あっ、ここは日本人の住んでいるところだ、だからもしかしたら何か食べさせてもらえるかもしれないと思って声を掛けたら、カチンカチンと中で鉄砲に弾を入れる音がして、これは大変だ、どうしようって怯えながら、目の前に大きな菜畑があったので、急いでそこへ逃げ込みました。麻畑だったんですね。麻の葉っぱは大きいんです。あの年は特に凄く、このくらいの高さでした。

やっと身体をその中に潜り込ませて、這って這って前に進みました。そして上の方に弾がどんどん飛んでくる。ちょっとうっかりすると弾に当たってしまう。みんな気を付けろ、子どもは腹の下で引き摺って行こうということで、やっと畑の最後のところまで行ったら、1メートルぐらいの溝でした。ここを跳び下りなければ、このままでは見つかってしまう。わたしは、どうせ死ぬんだからそこへみんなで跳び下りようというので、一、二、三で跳び下りたんです。でも幸い雨が多かったので、その溝の底は泥沼だったんですね。ですから堅いものに当たらなかったのだからただ気絶した、捻挫したというような程度で何とか終わったんですね。

親切なお百姓さんに、再三にわたって助けられる

それでわたしが一番最初に目が覚めて、喉が渴いて泥の水を飲みながら、みんなにその水を掛けて起こしました。もう鶏が鳴きはじめてから、早く出なきゃいけないって言って、その溝に段を作りながら、みんなを引っ張りながら上に揚がりました。コーリャン畑でも何でもいいから、とにかく畑の中へ入って、その中へ潜り込んでしまった。そこでみんなも疲れ身体も傷めていたし、わたしの足の激痛もひどくて、暫くは動けなかったんで、そこで2~3日いました。そしたら、お百姓さんに見つかって、いろんな食べるものを運んでくれました。

でも、いつまでもここにいると怖いから、とにかく移動しようということで、ある西瓜畑に辿りつきました。西瓜は、もう本当のご馳走です。喉が乾くと、西瓜を食べて、みんなお腹一杯になります。西瓜を管理する小屋があってその中に忍び込んでしまいました。みんなその中で寝てしまっていて、そしたら朝になってお百姓さんたちが出てきて、物凄いい顔でわたしたちを見ているんです。これはもうお仕舞だ、と思いました。どうせ死ぬならみんな一緒に殺して下さい。その時は裸でしたが、本当に恥ずかしさも何もないんです。着るものもないし、ただもう頭を下げ、どうか殺すなら全部殺して下さい、って言うしかなかったんです。そうしたら村に戻ってバケツで一杯食べるものを運んできて、食べる、食べるって、食べさせてくれたんです。ああ、これはいい人だ。あるおばちゃんが、先ずわたしに着るものを与えてくれて、涙を流して髪の毛を撫でてくれました。そこで暫らく

いなさいと言われて、そこに暫らくいたんです。

姉たちと引き離されて一人に

ある日、蒙古兵が馬で来て、先ずわたしを連れ去りました。わたしは行きたくないけども、どうしようもなかったんです。連れ去られて、その途中で、ある馬小屋のところで強姦されようとしたその時にお百姓さんに出会って、助けてくれました。難を逃れて、そのお百姓さんの家で半年ぐらいお世話になりました。外も凍って寒くなりました。もうここで凌ぐしかない、そこでお世話になって足の治療も受けました。

それでも、姉たちはどうなってるんだ、生きていいのか死んでいるのか、ということがいつも気になっていました。わたしはもう夢中でした。いつか関東軍は迎えにきてくれるんじゃないか。なにかの印を付けたいな、足を引き摺りながら裏山へ行って、いつも空を見ていました。そうしている内に、ソ連軍かなにかが、がやがやと村に入ってきたりするんで、その家の人は早く防空壕に入るんだ、と行って防空壕の中へ入れてくれました。しかし、こんなに世話になっては申し訳ない、わたしはまだ親族を探さなきゃいけないということでこの家を離れる決心をしました。申し訳ない、有難う御座いましたとお礼をいって、わたしはその家をでました。

ソ連兵の蛮行を目撃する

しかし、どんなに逃げても、人には見つかります。寒さに耐えられなく、結局は馬小屋の草の中に潜り込んで忍んだのはいいんですけども、お馬さんが驚いてしまって、蹴っ飛ばされ、それで人に見つかってしまった。でもその家の人はみんないい人で家に来なさい、家で療養しなさいって言うてくれたんですが、そこからわたしは何とかして逃げなきゃ、そして姉妹を探さなきゃ、この家に入っていたら関東軍はわたしを見つけることもできない、やっぱり畑にいなくては、ということで、また畑に行って、隠れてました。

なんか疲れたのか、わたしはそこで眠り込んでしまったんですね。寒さで身体が冷えて眠りが浅くなっていた時、助けて！という悲鳴が聞こえて目が覚めたんです。そうしたら道路にソ連軍のトラックがありまして、そこから悲鳴が聞こえたんです。助けて！というのは、確かにあの声は日本人です。わたしぐらいの若い女の子の声でした。トラックの上で強姦されたんでしょう、白い物体が地面に叩きつけられ、車で轢いて行ってしまいました。その場面は、思い出すだけでもおぞましく、それがわたしだったらという気持ちで、身が震えてしまいました。

親切なお婆ちゃんから賭博師の下へ

ある日、目が覚めたら、あるお百姓さんの家のお布団の上に寝ていました。優しいお婆ちゃんがわたしの顔を、じいっと見ていました。髪の毛がサラサラしていたので、きっと洗ってくれたんでしょう。身体は凄く楽になってました。でも足の激痛はたまらな

い。それでも又、眠りに入ってしまいました。そのお婆ちゃんはわたしにお粥を食べさせてくれたり、本当に介護してくれました。そこに一年ぐらいお世話になりました。戦争が落ち着いたから、自分は関東（注. 東北 3 省のこと）の方へ帰らなきゃならないからと、結局、そのお婆ちゃんが、わたしを別の人に預けることになりました。で、わたしはまた転々となったんですね。

そして人の家で働きながら、治療を受けながら、働きながら過ごしてきたのですが、最後は賭博師のところへ行きました。そこでわたしは燃料集めの役目をさせられました。籠の中に牛の糞を積んで持ってこい、それが燃料になるんです、乾燥した牛の糞は全然臭いがないんです。そういう糞拾いをしていても、わたしは山にいるんだから、関東軍の飛行機が来るんじゃないか、と思ったりして、本当に嬉しかったんです。そこで出会ったのが、牛の放牧する男のミンでした。足から血が滲んでくるのを見て、母親を呼んで足の治療をしてくれました。温かい綿入れのズボンも持ってきてくれて穿かしてくれました。その男の子がその燃料を下まで繰返し運んでくれて、それがまた楽しかった。

わたしがどんどん思い出してくるのは、中国にはこういういい人が、こういう善良な人が一杯いるんだ、と言うことです。でも、何であの逃避行の時に、あんなにわたしたちを襲うのか、わたしたちに対しての恨みだったのか、何なのか、分からなかった。

養父に引き取られる

それで最後に、現在の夫のお父さんが近所の人たちからわたしのことを聞いて、このままじゃあこの子は死んでしまう。だからとにかく私がお金を出してこの子を受け入れようと言って、わたしを迎えに来てくれた。賭博師はばくち打ちですからお金を貰えば喜んで、わたしを受け渡してくれた。でも、お金を遣って無くなったら、また、わたしたちのところに来て、お金を出せ、わたしはお前の命の恩人だ、と言ってくるんですね。その賭博師は、何と言ったらいいのでしょうか、本当に仕事をしないで近所からも恨まれているような人なんですね。中国が解放されてその人は人民裁判の下に、ずっと悪いことをしてきたということで、人民裁判の下に死刑になったんです。

逃避行後はじめて声をあげて泣いた

中国が解放された時に役人の方がわたしの家に来まして、「あなたは日本人だけど、あなたには罪はないんだ、中国の人民も沢山の血を流している。日本人の開拓団の人たちも、多くの血を流している。これが戦争なんだ。これからは世界から戦争の無いように、わたしたちは日中友好のために働きましょう。だから、中国の人も被害者、あなたも被害者、一番悪いのは帝国主義だ、軍国主義だ。これを世界から無くせば、わたしたちは平和な世界を造っていかれるんだ、これから堂々と生きなさい、大丈夫ですよ。」と言ってくれたんです。その時は、終戦から三年が経っていて、逃避行を始めてから三年間、泣いたことがありません。何とかして生き抜こう、あの小母さんの声、王君の声、それに励まされてわ

わたしは生きて来ました。その中で本当に、この話を聞いた時に、母親の胸に抱きかかえられたよう、何か知らないけど、声を出して泣きました。初めて泣きました。

日本の行った戦争は一体何だったのか

だけど、わたしは今後どうやって生きていけばいいのか、自分の生きる道を探さねばならない。これまでの自分の罪、侵略戦争とは知らず、東洋平和のため、五族協和のため、日本人は偉いんだ、私たちが駅に着いた時に、現地の人々が最敬礼した、やっぱり日本は偉いんだ、わたしは満州に来てよかったのかもしれない、と思った。王君の言ったことを信じなかった、そういうことの繰り返しで、自分はこれからどうしたらいいんだろう。これを、整理をしなければ前に進めないんだ、ということを実感しました。

それからは、中国には、過去の歴史を忘れてはいけないということで展示会（学習会）がありまして、それに多くの村の人が参加します。最初はそれに参加することにこだわりがあったのですが、現実を、真実を見なければわたしは生きていられない。わたしは自分のこだわっていることを解かすためにも参加しなくてはということで、2年間参加しました。それはもう辛いことでした。何と言っても信じきってきた自分の国が、何でこんな悪いことをしたんだ。旗を振って、勝って、勝って下さいと、何で侵略戦争に、兵隊さんを送り出したんだろう。何でそんなことをしたのかな、何でこんな悪いことしたのかな。そのことでもう心の中が一杯でした。何て言ったら、どうやって整理したらいいのか。

毎日、自分を見つめながら勉強しました。政府は、中国の人も被害者、あなたも被害者、一番悪いのは帝国主義だ、軍国主義だ、そういうふうに言いますけれども、村の中には、本当に日本人の軍刀の下で殺された、日本人にいじめられた、そういう遺族が残っているんです。わたしが生きていくことを知ると、やっぱり罵られたり、うちの家族を返して、何であんたは生きてるんだという風に言われたりする。でももしわたしが、その人の身になれば同じように言ってたかもしれない。そりゃあ当然のことです。わたしは、これからみなさんと一緒に、お互いに助け合って頑張っていきたい。日本人は悪いことをしました、申し訳ありません。でも、わたしの命を助けてくれたのは中国のみなさんです。ですからわたしはその恩返しのためにも、みなさんと一緒に一所懸命働きます。そうやって自分で自分を励ましながら、本当に大変な思いをしながらも前向きに展示会（学習会）に参加しました。でも、一番ショックだったのは、子どもたちが日本人の鬼の子どもだと罵られることでした。これが一番辛かった。子どもたちには、とにかくあんた達はいずれは分かる日が来る、お母さんの行動、お話、やること全てをみなさんに見てもらって、わたしも堂々と言いました。みなさん、わたしを看視して下さい、わたしに過ちがあったらわたしは直ぐに直します、教えてください。こういう気持ちで社会に貢献し、働いて来ました。子どもたちにも、いずれはみなさん、お母さんが日本人でも、どういう人なのか、ということを知って分かってくれると思うから、安心して我慢して、前向きに生活しましょう。子どもたちはわたしのことを理解してくれたようでした。

遅らされた帰国、冷い日本政府の対応

そういう中で日本には帰りたくても帰れない状況が続きました。わたしは一刻も早く日本に帰って、あの小母さんの一言、「誰か、生きて日本に帰って、親族や国に訴えてくれ、わたしたちは何でこんなザマで死ななきゃなんないのか、ということ伝えてくれ」と言った言葉、日本の国に帰って、本当にどうなっているのか確かめたい。そう思いつづけていました。

1972年、待ちに待った国交が回復して、今度は帰れると思った。しかし、わたしたち残留婦人、～その時点で13歳以上はもの心もつき判断ができる年頃だから残留婦人、13歳未満は残留孤児～、は勝手に中国人と結婚したのだから残留は自己責任である、自己の意思で残ったのだと国は断定しました。そのために残留婦人は援護対象外ということになったんです。そのために残留婦人の帰国が大幅に遅れました。みなさんもご存知のように、あの残留孤児が肉親探しで涙の対面、全国のみなさんが涙してくれました。その中には悲しいことに残留婦人の姿はありませんでした。それは国から差別されていたからなんです。

わたしはやっと妹が見つかりまして、妹の協力で日本に帰って来られたのが1978年でした。その時に日本の社会を見て、(帰国事業が)戦後処理の一環としての受け入れじゃなかったことが分かりました。そのために、いろんな事件が起き、帰ってきた人もみんな戸惑いました。これでは大変だ、わたしはその時に思いました。わたしに託された命は、大地に眠っている多くの人たちから託された命だ。わたしがみなさんの援護活動をしなければ申し訳ない。わたしは生涯を懸けて国に問うことと、みなさんが安心して生活できるよう援助する会を作らなければならない。そこで初めて分かったのが残留婦人と残留孤児と区別されていたことでした。

中国帰国者の会の発足、そして国の責任を求めて裁判に

悔しさと、情けなさと、もうごっちゃ混ぜになって、とにかく会を作って寺小屋式の日本語の教室から始めようっていうことで、日本人の市民の方々と、お話ししたら協力して下さいまして、10人ぐらいから発足しました。

その後、1984～5年ぐらいから援護措置法の制定に向けて、活動、行動を起しました。署名もけっこう集まりましたが、みんな棚上げになってしまいました。でもやっと1994年に議員立法で法律ができました。でも、この法律ではみなさんが安心して生活できない、だから見直しをしてくれと言っても、それは棚上げになっているんですね。それでわたしは、高齢化した婦人、そして孤児の人たちが未だに苦しめる状態を見て、残り少ない老後の生活を何とかして安心して生活していられるように、もうこれ以上我慢できないと、2001年には裁判を起しました。その時は、とにかく勝っても負けても国の姿勢を見たい、という一心でした。わたしたちの永年の夢は潰された。その潰された原因は何処にあるのか、国の答えを聞きたかった。その一心で裁判に懸けた。裁判の中で、わたしは叫びまし

た。「お国の為に中国へ行って、そしてやっと自力で帰ってきて、また国を訴えるということがどんなに辛いことか、どんな辛い思いで訴えているか、分かりますか？」と。

でも、やっぱり国というのは、過去は過去、現在は現在という言い分なんですね。歴史は飽くまでも歴史として残る、決してそれは消えるものではない。今、残留邦人の存在というのは、とにかくみなさんが見てはっきりお分かりになるように、国は命令して国民を動かす。そして戦争が終われば放棄。更にその事実から逃れようとします。そしたら国民は人権も無い、保護も無い。では、これから国民は誰を信じて生きていけばいいんでしょうか。これはわたしの本当の生涯の実体験で感じたことです。

とにかくこういう問題の中で、わたしはこの裁判を通して、いろいろ闘ってきました。国の姿勢が余りにも後ろ向き、余りにも認識が無い、余りにも勉強してない、余りにも歴史を放棄している、悔しくてなりませんでした。負けましたけれど、東京地裁での判決は内容が良かったんです。今日、判決全文の冊子を持って来ましたので、みなさんご覧になって下さい。それが基で、何とか今回の新しい支援策が成立しました。しかし、充分ではありません。国の責任として認めたものではありません。ですから、行政の窓口でもまだまだ不十分な点がいっぱいあります。わたしたちの会は、各自治体を廻って、本当にみなさんが、その人権を護る窓口として、人権問題を抱える窓口としてしっかりやって欲しい、と御願ひしています。わたしたちの裁判は失われた人権を取り戻すために頑張ってきたんです。

今回の支援策はまだちょっと不十分ですが、これまでのものより一歩進んだ支援策ができました。今の内は、これで何とか落ち着くんじゃないでしょうか。でもまだまだ二世、三世の問題、様々な問題が山積みになってます。今はわたしたちが各自治体を廻って対処していかなければならないという事態になっております。ちょっと時間が長くなってしまったんですね。すみません、今日はここまでで、みなさん本当に有難うございました。(拍手)

＝講演終わり＝

質疑応答

司会 「休憩中にみなさんから、沢山のご質問を頂きました。全部はちょっと無理なので、選びましてお伺いします。」

Q1

「1978年に鈴木さんは帰国されましたが、中国生まれの旦那さまとお子様は日本に帰ることについて、説得はどうされたのでしょうか。」

また、中国に残っている里親といいますが、義理のお父さんとの交流についてはどうだ

ったのでしょうか。

それから、帰るということに対して日本の政府からは、どのような援助があったのでしょうか。」

里親じゃなくて、養父ですね。一時養女となりまして、その家で傷の手当もして頂いて幸せに過ごし、その家の五男と結婚したんです。お舅さんにもなるわけです。本当に幸せな円満な家庭で、主人も優しくて幸せでした。

でも、実は、主人はわたしと夫婦になるのは抵抗してました。親に反抗してたんです。事情を申しますと、主人は日本軍に連行されてシベリア国境で塹壕掘りをしてたんですね。そこで重労働を強いられ、いろんな苦しい思いをしてきた。中国が解放して、やっと自分の実家に帰ってくるのができた。そういう過程の中で、日本人と結婚するのはイヤだ、日本人にさんざんやられたのに何で俺が日本人と結婚しなきゃならないんだって、そういうことで親に反抗してたんです。

でも親は、この人に罪はないんだから、夫婦になんなさい、賭博師が襲い掛かってくる圧力を防ぐためにも、夫婦になれば安全だから、お前夫婦になれ、と親から言われて、強制的に夫婦になったわけです。その当時、わたしは言葉も分からないし、どうしていいか分からないし、本当に辛かったんですよね。1年ぐらい二人は話することもなかったんですけども、そういう感じでした。

養父は亡くなり、最近中国にお墓を建てましたが、わたしは行かれなかったので、子どもたちにお墓参りしてもらいました。

Q2

「日本に帰ってくる時に、旦那さまをどう説得されましたか」

こちらに帰ってくる時は、わたしは一時帰国で帰ってくる許可が下りたんです。その時は身元引受人制度があり、親族が身元引受人の申請をしなければ国費が下りないんです。そのため親族がいても多くの婦人たちはなかなか帰ってこられない。

なぜなら、身元引受人が自分の経済状況を申告しなきゃいけない、それにみなさんけっこう抵抗を感じてなかなか提出できない。帰させてあげたいけど家の経済状況まで報告するのはイヤだ。旅費を自弁できない原因はなぜかっていうのを全部書いて出さなきゃならないんですよ。

もう一つは、親族でも多くの人たちは高齢化して、年金生活をしてる方が多かったんです。それと両親のいる人や、ある人の両親は大陸で亡くなった、ある人は兄弟が残ってた、ある人は従兄弟とかそういう親族が残ったということなどで、なかなか思うようにその人の手続きが早くできなかつたので本当に遅れたんです。

わたしは幸いに妹がいまして、一時帰国ならいいよと、手続きしてくれたんですね。そ

の時、何で一時帰国なのか、何で永住の手続きしてくれなかったのかと、心の中でちょっと恨んだんです。日本の生活の状況も知らない中で、とにかく日本の土を踏めばそれでいいわ、と思って帰って来たんです。

主人は、わたしが日本に帰りたいということはよく知ってたんで、帰れる時があれば帰ればいい、帰って親族に会うのもそれも大事だろう、と理解してくれました。子どもたちも、お母さん日本に行っても早く帰ってきてね、また国交がヘンになっちゃって、帰ってこられなくなっちゃったらやだよ、と言ってくれました。みんなわたしを支持して、一時帰国を応援してくれました。

そのころに、わたしの姉が長春で生きていたことを知りまして、やっと33年ぶりに姉に再会したんです。その時に姉が帰ろう、日本に帰ろう、今度こそ帰れるかもしれないということで、二人で約束して手続きをしました。家族も同意してくれたので、とにかく一旦自分の祖国の土を踏もうということでした。

飛行機に乗って、あの機内放送で、「みなさん見て下さい、これが日本ですよ」っていうのを聞いて、あの時は何て言ったらいいのか、下を見た時に、涙がブワッと出ちゃったんですね。ああ日本に来たんだあって言う思いでね。

日本に帰って妹の生活状況を見たら、生活状況は甘いもんじゃなかったんです。これでは本当に迷惑だろう、わたしは恨んだことを申し訳ないと心の中で思いながら、直ぐにアパートを借り、3万5千円の長屋に住んで忍んだんです。

先ほど申しましたように、あまりにも国の戦後処理の一環としての受け入れじゃないために、いろんな問題が起きていたんです。もっと日本の国の政治関係とかか帰国者に対する情報を掴むために、～中国にいるときは情報が全然入ってこないの～、わたしが残らなければ、みんな帰ってこられないと思いました。

姉が一足先に一時帰国で帰ってきました、わたしの兄さんの家に世話になって、わたしは妹の家に世話になりましたけど、申し訳ないので直ぐに出ました。姉が帰らなきゃならない時期がきて、中国に帰ったらもう日本に帰ってこられないよねって姉の呟いた言葉で、わたしもシーンとしてしまっていて、そうだ、わたしは残る、残る手続きをしないと決心したんです。

東京都へ行って、わたしは子どもじゃありません、わたしは立派なおとなです、わたしにも人権があります、自由を下さい。わたしは永住に切り替えます、これから日本で生きていきますと言いました。しばらく話は混み合いましたが、納得してくれました。それで永住に切り替えて、2年後に主人や子どもを呼び寄せました。

「説得は必要なかったんですね。」

はい、必要なかったです。主人は、俺も定年だし歳なんだから、中国では借老同穴って言うんですね。歳とったら夫婦でお互いに寄り添って生活していくのが筋だから、俺行ってやるよって言うてくれたんです。

「良いご主人でよかったですね。」

はい。

Q3

「次の質問ですが、大変失礼ですけども、怪我をされたお体でさっきも歩いておられるお姿を見て大変だったなということはよく分かるのですが、これだけのエネルギッシュな活動をされてこられたという、そのエネルギーの源泉はどこにあるのでしょうか。」

何て言ったらいいんでしょうか、自分の生きる道を求める、わたしはどうやって生きていったらいいのか、足の痛みよりも自分の分からなかったことを明確にしたいことの一心でした。今だったら病院に入院して厚い手当てを受けながら、車椅子に乗って手当てを受けるような状態ですけども、そのまま放置しながら夢中であの時あんなに、どうやって足を動かしていたのかなって不思議に思うぐらい、足の痛みなんか忘れちゃうんです。ただもう頭の中でこの謎を解くために夢中でした。それが力になったのかもしれません。

Q4

「次に日本の『憲法九条』のことは、中国では知られていないんでしょうか。」

わたしは1978年に帰ってきたので、その時代は九条のことはよく知りません。ただ中国は共産主義国家ですから、世界の平和とか、「不戦の会」とか、そういうようなことは聞いてましたね。もう戦争をしちゃいけない、二度とこういう悲劇を起しちゃいけないっていうことは、学習の中にも入っておりました。

わたしが帰ってくる時は、日本人に対してすごく人権を護ってくれました。中国は1960年の時代は不作で3年間食べるものがないんです。農家もたべるものもない。主人は鉱山の労働者でしたから、国庫の穀物を配給で分けて食べる状態なんです。国庫ももう底が尽いてるような状態になって、本当に苦しかったんです。

その時に日本人はお米が主食だから、特別配給としてお米を配給してくれたんです。お砂糖も特別配給してくれました。わたしは涙が出るほど、何と言っていいか分からなくて、特別扱いされればされるほど、また辛いものが込みあがってきました。申し訳ないと、困っている人に、赤ちゃんのお乳のない人にあげたり、みなさんに分けました。

そういう時点でしたから、憲法九条とかそういう話は聞いてませんでした。

Q5

「お話しの中にありましたが、中国のみなさんの対日感情についてはいかがですか。78年に帰られましたから、最近のはちょっとお分かりにならないかもしれませんが。」

最近は分かりませんが、わたしも中国に行ってませんので。わたしたちの時代は、日本に対して凄く良かったんです。わたしたちの肉親探しとかは、中国はもう本当に前向きに一所懸命、残留孤児や婦人の名簿を調べてくれて、日本大使館に知らせてくれたんです。全面協力するから、あんたたちはいつかは帰れるかもしれないよって、凄く励ましてくれ、わたしの姉が生きてたっていうことも調べて探してくれたんです。それだけに日本と中国は、これからは固く結びついてしっかりと世界の平和を護っていこうって言う趣旨がけっこう強かったんです。

Q6

「みなさんのような残留婦人、或いは孤児といわれる方々に対しての支援策について、今回の「残留邦人等支援法改正」が施行されますけれども、残留邦人、残留婦人原告団、原告団支援のみなさんは、どのようにこの「改正」を受け止めておられますか。」

お話しすると長くなるんですが、とにかく国の責任を受け止めた「支援法」ではないために内容的には不安定なところが数多くあります。課題は残されています。

生活保護制度ではない支給金制度となり、窓口が代わりました。生活保護制度というのは、みんな凄く悩まされてきたんです。養父母の墓参もできない、行くと給付がカットされてしまう。何か買いたいものを買ったら、それは贅沢だと言われる。子どもと一緒に住んでもいくら収入があるか、いくら出してるかとか。子どもと一食以上は一緒に食べちゃいけない、一緒に食べてもいいからそれは領収書を出しなさい。収入認定とかいろんな面でみんな悩んで、ノイローゼになった人も多くいました。

それが今回の法「改正」で、少しは解消されました。生活保護制度ではないけれどもその準用でしかありません。各自治体によっても格差があります。自治体の中でもちょっと混乱しているのですが、内容的にはいわば生活保護と全然変わらないんです。資産はどれくらいあるか、全部調べてチェックして、厳しい状況になってるんです。

問題としては、残留孤児が60歳以上で亡くなった人は、その配偶者はその支給金を受け取られるんですが、60歳以下で残留孤児が亡くなった場合、その配偶者はそれは受けられないんです。それは本当に不合理で、夫婦共々困難を乗り越えて生活してきた人を、なんで60歳という線をひくのか納得できないんです。わたしたちがこれからやることは、自治体にごく手厚く、細かく、本人の一人ひとりの状況を調べて、本当に人間として、尊厳が護られるよう、丁寧に扱って欲しい。

また、二世、三世の問題があります。残留婦人の二世っていったら、もう70近いんです。そういう人たちをどう扱うか。年金も無い、何にも無い。その人たちが働けなくなったら、どうなっていくか。これから何とかしていかなければならない。

子どもの教育、三世の子どもですけども、これから進学します。そういう窓口、進学の方法、子どもたちがどうやって大学へ入っていくかという段取りの仕組みも全然考えてない。今あるのは、ただ残留邦人その個人だけが対象です。それでは同じように苦しんできた家族が、このままでは、やっぱり親として心残りがある。こういう人たちを全面的に支援していくために、二世、三世の問題も含めて相談窓口で、いろいろ相談に乗る。就職問題とかそういうのもいろいろ悩んでいる、仕事先のことでもいろいろ問題がある。未払い問題で、ヘンな扱いの会社もありまして、わたくしも本当に闘いまして、40万を取り戻したこともあります。

残留孤児の女性でその旦那さんが一所懸命働いてきたにもかかわらず、年金制度で不利な条件になっています。

それから残留婦人の子どもも差別無しに、日本国籍に入れるように変えなければいけない。これは本当に難しいんです。テストがあり、それに応じられなければ、もっと勉強しなさい、と言われる。これは男女差別です。みんな諦めてる。

だけど、男性の孤児の子どもは父系主義ですから、直接戸籍に入れます。みんな日本人になります。だけど、残留婦人の子どもは、宙ぶらりんになっている。日本籍になってこの子どもたちにもいい学校に入りたいという親の希望もありますが、なかなかそれに応じてもらえない。

二世の呼び寄せ家族はみんな言葉が分からない。日本語学習も受けられなくて、そのまま働いてきた。みんな零細企業で働き、保障も何にもないところで働いていて不利な条件が一杯。これから先がある子どもたちのためにも三世のためにも、やっぱりこういう人たちの相談窓口も兼ねてやって欲しいというのが現実にまだ残ってるんです。こういう差別の無いように、残留婦人の子どもでもみなさん順調に帰化できるように交渉しなきゃならない。細かいことを言えば切りがないですけども、いろんな問題が残ってます。

わたしたちも自治体廻りして、こういうサイドで、こういう形の枠の中で何とかいい方法を考えて行く、実際にわたしたちが援護活動をしてきたその体験を話して、こういうことがある、ああいうことがあるというのを提出しながら自治体と相談しながら、一つひとつ勝ち取っていくことをこれからやっていかなきゃいけない、これまでもやってきました。けれども自治体によっていろいろ遣り方が違ってますので戸惑う人も出てきますから、これからも頑張っていかなきゃならない、と思ってます。

Q7

「本来、国が政治がやるべきことをやってこられたこの30年余りという感じがいたします。また、言葉ができないという、言葉が分からないことで本当に不利な思いをされた方が沢山あったわけですね。」

最近、親と一緒に同伴で帰ってこられるようになった。その家族は、親と一緒に国費で

帰ってきますが、その人たちは一年ぐらいは、日本語の研修を受けられるんです。けどあとの家族、自主帰国で日本に帰ってきた家族の場合は、一日も日本語を勉強する余裕がなくて、来日したら直ぐ働きに出なきゃならない。言葉の分からないままに生活していく、それでもみんな一所懸命働き、一所懸命生活しています。こういう人たちを見棄てちゃいけないんですよ。

国としても、本当に温かい手を差し伸べて協力してもらいたい、というのがわたしたちの信念です。この支援策の中で、地域支援ネットワークというのがあります。地域の方々と本当に交流を広めて何かやっ払いこう、これまでは帰国者と日本人の間にちょっと壁があるんです。近づきづらい、言葉が分からない、帰国者の方も言葉が分からないから言葉の使い方で笑われるんじゃないか、こだわりがあってなかなか馴染んでいかれない、というようなことがあります。

地域で支援するネットワークを広めていこうということで、今、三鷹で「憩いの家」という場所をつくりました。市民の方と一緒に楽しく、歳とって楽しいこともしなきゃ！むかしの歌を唄って楽しもうよ！というような居場所づくりを始めました。それを各地域につくって、みなさんが「憩いの家」みたいに、あそこに行けば何か分かる、あそこへ行けば何か勉強できる、あそこへ行けば思いっきり唄える、楽しめるという居場所づくりを、市民の方の協力を得ながら各地域でつくっていく、これがわたしたちの思い、希望です。

Q8

「最後の質問です。この会は「憲法九条を考えよう」という会ですが、こうした運動に対して率直なご意見、ご感想がございましたらお聞かせ下さい。」

わたしも憲法九条を読みました。これは絶対に、日本は護らなきゃいけない。武器を持つちゃいけない、武器を持って国から外へ出ちゃいけない。憲法九条が、各国にそれが持てたら、世界中に戦争はないじゃないですか、これは護っていかなきゃいけない、ってわたしは常に思っております。それが一番大事だと思います。武器を持って外に出たら、これは人殺しです。正義なんか何もないです。戦争に正義はありません、わたしは実感しております。それよりも、もっと平和的にみんなで各国との連携を、本当に友好関係を深めて、平和な仕合せな、みんなが、世界が平和にならなければ、自分だけが平和になっても何もならないんですよ。これは本当に世界に広げるべきだと思いますね。日本は憲法九条を護らなければならぬと思います。

「本当に長い間ありがとうございました。」

(拍手)

質疑応答 終わり